攻撃的な子ども と 親子関係

稲田準子

1. 攻撃的な行動とは

攻撃的な行動には、身体的直接的攻撃や、言語的なものなど、いろいろの形がある。

(1)他人に身体的苦痛を与える。（つきとばす。つねる。なぐる。）

(2)他人を精神的に不愉快にする。（遊んでやらない。おどす。非難する。）

(3)他人の持物を攻撃する。（えんぴつやクレヨンをたたきつける。カバンをける。本をやぶる。）

(4)第三者を介して攻撃する。（他人に命じて攻撃を加える。いいつけ口をする。）

(5)権威者に対して批判要求をする。（先生などをひやかす。あざける。はっきり要求する。口ごたえをする。）

以上の面について調べることができる。ある程度の攻撃的な行動は、幼児において発達の正常な現象として現われる。いわゆる反抗期に、幼児は自分の意志を通そうとするが、正しい判断ができず、親から反抗する子どもと心配されることがあるも、性格の形成に重要な時期であり、子どもの発達を認めこの時期を巧みに切り抜けることが必要である。

攻撃的な子どもとは、普通以上に、反抗的な子どもや、乱暴をする子ども、かんしゃくを起す子ども、弱いものいじめをする子ども、強情を張っていうことをきかない子どもなど、いろいろな問題の子どもを含んでいる。

これらの問題の行動も、家ではしても外でしないもの、幼稚園などではするが家ではしないもの、或いは内外どこでもするものがいる。実際にはどこででもするものより、案外どちらかだけにかたよるものが多い。

2. どうして攻撃的な行動を示すのか

人は欲求が満されない場合、いろいろの方法で解決しようとするが、その中に、攻撃的反応をすることで緊張の解消をはかる適応機制がある。

欲求の不満にさいして怒るということは、原始的反応で、赤ん坊

はすぐ泣いて怒り、動物は怒ってかみつく。幼児の行動をみると、不満のとき、不満の原因でない母親などに攻撃を加えたたいたりする。子どもはお菓子を食べたいがもらえないと、泣いて足をばたばたさせてあばれまわることもある。自分自身に攻撃を向けて、かんしゃくを起したり、何の関係もないものや、更には弱いものに攻撃をむけられたりする。

攻撃的な行動の強さは欲求が満されない場合、欲求の強いほど増し、一方罰が予想される場合には、減少する。

親にきびしく罰せられる子どもが、家ではおとなしく幼稚園ではたいへん攻撃的である例もよく見受けられる。攻撃的な子どもは、劣等感や不安定感をもっていることが多く、家庭で親が子どもの欲求に適当に応じなかった場合におこり易い。経済的状態が下のときにも欲求が満されないことが多く、攻撃的な行動があらわれる傾向がある。

特殊な心身特性をもつもの（例えば、テンカン性精神病質児など）がはげしい攻撃的な行動を示すことがあり、また、身体的条件も関係があり、かぜをひいたり、疲れたりしているときには攻撃的な行動が多くあらわれるといわれている。

環境的な影響として、生活している地域や家庭に争いが多いと自ら乱暴になり易い。次に幼児の行動に影響する親の態度を考えてみたい。

3. 親の態度

改めて強調するまでもなく、性格形成の過程に親の態度はたいへん重要であり、ふつう多くの親は、子どもがよい社会人に成長するよう、愛情をもって接しようとしている。「問題の子どもは、問題の親から生れる」といわれるように、親の不適当な態度から、子どもが不安感や、劣等感をもつことが多い。

親の態度にどのような型があり、それが子どもにどのような影響を与えるかについては多くの研究が行なわれている。要約すると、望ましい親の態度――保護的、合理的、民主的、受容的、温かさ、寛容、など――は子どもの望ましい特性――社会性、友好性、指導性、安定性――と関係があり、望ましくない親の態度――拒否的、支配的、専制的、干渉的、冷たさ、など――は子どもの望ましくない特性――反抗性、依存性、攻撃性、不安定性――と関係があると報告されている。しかし細部では研究者によって、多少一致していない点があり、男児と女児で相違がある場合も見出されている。従来の研究で、子どもに攻撃的行動が多く見出される親の態度の主な型として、拒否的、過保護的、服従的、不調和が見出されている。

4. 親の態度の調べ方

親の態度を調べる方法として、質問紙法、面接法、観察法、作業検査法、投影法など、それぞれの場合に応じて適当な方法が用いられている。しかし、各方法の結果が必ずしも同じ傾向を示さず、例えば、母と子どもが一しょにいる場面で観察すると、子どものすることにたびたび干渉する母親が、質問紙では反対に答えたりする場

合もあるので、親子を一しょに観察或いは面接することものぞましい。

5. 親の態度に影響する要因

(1)社会的背景

親の態度は、親が属している社会階級、更にその社会を含む文化の特質に大きく影響される。各社会は、特有の文化を持ち、それに基づいて子ども達の養育を行ない、厳しい態度をとる社会、放任しておく社会があることが、文化人類学者によって報告されている。日本では幼児に対する母親のしつけが、一般に気ままで無計画で一貫性がなく、溺愛的な型が大半を占める傾向があるとされる。

社会階級との関連については、津守真氏他(1)は育児意見と社会経済状態との関係を調べ、社会――経済状態の上のものに民主的、寛容な意見が多く、社会――経済状態の下のものに、きびしい意見が多いことを報告している。津留宏氏(2)も、社会階級によって教育に対する熱心さの程度にちがいがあり、中産階級の母親が、もっとも教育に熱心であることを見出している。中産階級の親については、後にくわしく述べるが、上層階級にのぼる可能性もある一方、下層階級に落ちる危険性もあるので子どもの養育に関心をもち、熱心である。

(2)個人的条件

親の態度は、文化や社会階級によって大きく影響されるが、更に、親・子の個人的条件により複雑な影響を受ける。親の側の条件として、性、年令、性格、教育程度などが考えられるし、また子どもの数、出生順位、性などによっても影響される。稲田(3)は養育態度の自由な母親と厳格な母親の性格特性について調査し、自由な態度の母親は、一般によい情緒的適応を、非常に厳格な態度の母親は、葛藤が多く、情緒的適応障害を示すことを見出した。親の態度は、親自身がその親との間に経験した親子関係をふくめ、親の現在に至るまでの生活経験によって規定される面もまた大きい。

6. 攻撃的な子どもの親の態度

幼児の性格形成には、家族のそれぞれの関係、夫婦関係、父子、母子関係、きょうだい関係などが影響する。最近考案されたＰＡＲ１スケール（親の態度測定尺度）では、夫婦間の調和という項目をとくにとりあげている。家族間の人間関係全般について調査することは望ましいが、実際問題としてむつかしい点が多く、また一般に父親は職業を持ち、家を外にすることが多く、子どもと接するのは、主に母親で、幼児の世話は、母親がこれを行なう家庭がほとんどであり、幼児の性格形成に重要な影響を与えるのは母親の態度であると考えられる。

攻撃的な子どもの親の態度としてあげられるものに、

(1)専制　専制的な親に対しては、子どもは服従的で指示に従って行動するが、親がいない場合、他の子どもに対して攻撃的な行動が多い。

(2)溺愛　保護を与えすぎて、子どものいうまま、思いどおりにして

やって甘やかす親は、子どもの世話をしすぎ、独立心を損い易く、わがままで、思い通りにならないと攻撃的な行動、大声で泣きさけんだり、ひっくり返って足をばたばたさせたりする。またこの型の親は、なんとかして子どもの欲求を通してやろうとするので、子どもはますます暴れて思い通りにしようとする。

(3)拒否　子どもの愛情をみたさず、無視放任する親の子どもは、人の注意をひこうとする反応を示し、また独立的で反抗的になる。

(4)偏愛　親が不公平でえこひいきする場合、可愛がられない方は、拒否と同様に攻撃的な子どもになることがある。

子どもの攻撃的行動と、母親の育て方との関係をドラード(4)やシアズ(5)の考えに基き稲田(6)が調査し、幼時及び現在の母親の養育態度、罰の程度について検討したところ、幼時の養育方法、即ち授乳、離乳、排泄訓練、及び現在の養育態度との間には、精神分析学的な立場から主張されるような特別な関係はみられず、男児においては、きびしく罰せられたものが高い攻撃的行動を、女児はその逆の傾向を示している。しかしこの調査では、母親との面接によって研究しているため、実際の態度を捉えているかどうかに疑問がある。そこで次に(7)、母子一しょの場面について調査し、幼稚園で攻撃的な子どもの母親は、子どもの作業に対して、どんな傾向を示すか考察した。一般に高い目標を示している。一室に母と子どもを一しょに入れ、小箱の中の小さな鉄棒を他の箱につまんで一本ずつ移し入れる作業を子どもに行なう。各回十五秒、ひとり五回。方法を説明後、母親に「指先きの器用さをみるテストです。六才児の平均は約十本です。お子様がどれ位おできになるか、あてて下さい。」とたずね、各回どれ位できると思うかたずねる。結果として、実際の作業成績は、攻撃的な子どもと普通の子どもの間に差がないのに、攻撃的な子の母親は、全体的に高い目標を示している。攻撃的な子どもと、対照群の子どもとは、母親の教育程度、年令などに差がなく、同程度の社会経済的背景をもち、中産階級に属している。このことから、攻撃的な子どもの母親の態度の一に、期待が大きいということがあげられる。

7. 期待しすぎる親

このように子どもの実際の作業成績にかかわりなく高い目標を示し、高い作業を期待する親は、養育の他の場面においても、子どもに対して、過大な期待をかけることが、しばしばあるのではないかと考えられる。

前にも述べたように、中産階級は、社会的可動性にとみ、次の世代にかける期待が大きく、学歴が重要性をもつと考える親が多く、子どもの教育に熱心であり、よりよい学校に進ませたいと、幼児期から期待する。

また欧米に比べて、日本の母親は、子どもへの期待が強いと言われる。母親が自分自身の生活をたのしむことが少なく、子どもを同一視して、自分が果せなかった夢を描く。最近家庭生活の電化による母親の余暇、家族計画による子どもの数の減少で、子どもへの期待が一層高まる傾向がある。

この型の親は、教育に熱心であり、質問紙などで調査すると、かなり理想的な養育態度として報告されることがあり、親自身は、期待しすぎるとは考えず、教育熱心な親であると自任して、ますます期待を強める。子どもの心理的発達を理解せず、発達段階以上の、能力以上の要求を出す。同じ成績でも、目標の高さに達しない場合は、失敗を、目標が低くて、達した場合には成功を感じる。親から能力以上の期待を持たれると、背のびしてもとどかず、失敗感や劣等感をもち易い。自分自身に高い目標を持つ親は、子どもにも高い水準をおく傾向があり、親の性格が安定している場合には、実際の作業成績とあまりかけはなれない目標をたてるが、安定性に欠けると、事実を理解せず達せられないような目標をおく。

子どもに期待しすぎる親は、性格、知能、身体、各面に高い目標をもち、乳児の時から問題行動をおこし、発育のよい子どもにしようと食物を無理強いして、食欲不振をひきおこしたり、年令以上の玩具を用意して興味をなくしてしまったり、更に音楽や絵を、子どもの興味にかかわりなく習わせ、すっかり反抗的な子どもにしてしまうこともある。学業についての期待が高すぎ、無理をして優秀児の集まる学校に入学させたりすると、普通学級なら上の子でも劣等感をもち、学習に興味を示さなくなり、期待にたえかねて、勉強しなくなったり、問題行動をおこし易い。

親の子どもに対する期待には、高さだけでなく、その方向も、理想としてもつ人間像によって相違する。

子どもの攻撃的な行動に及ぼす要因はいろいろで、決して親の態度だけによって決まるものでなく、親の態度も、各家庭で条件が異なり、複雑である点を充分考慮しなければならない。

以上攻撃的な子どもとなる重要な要因として親の態度をとりあげ、主に期待しすぎる親について考察してみた。

社会経済的に中位の家庭の子どもが多い幼稚園においてみられる現象で、社会的背景を異にする子どもについては、また他の点が問題の中心となってくるが、親はまず子どもの発達程度をよりよく理解し、過大な期待をかけないことが望ましいと考えられる。

（安田女子短期大学）

1. 津守真・稲毛教子　乳児の精神発達に及ぼす育児態度の影響　教育心理学研究第5巻4号　昭和33年
2. 津留宏　日本の母子関係　黎明書房　昭和33年
3. 稲田準子　母親の養育態度と性格特性との関係について　日本心理学会第21回大会報告　昭和32年
4. Dollard, J. et al, Frustration and Aggression. 1939
5. Sears, R.R. et al, some child rearing antecedents of aggression and dependency in young children. Genet. Psychol. Monogr. 1953, 47
6. 稲田準子　母親の養育態度が幼児の攻撃的行動に及ぼす影響について　広島大学教育学部紀要　第1部4号　昭和31年
7. 稲田準子　親子関係の一考察　母親の子供に対する期待と子供の受け取り方について　日本心理学会第24回大会報告　昭和35年